

原典資料翻訳

ジュリオ・デ・メディチとマリオ・マッフェイ
 ——ヴィッラ・マダマ造営に関する2通の書簡翻訳と解題——

深田麻里亜

[翻訳]

[書簡1] 1520年6月4日付けの書簡¹

キリストの名において信仰深い、親愛なる父にして兄弟へ。今月初めの貴殿による最新の知らせを受け取りました。私たちがあのふたりの馬鹿者には満足しておらず、貴殿はジョヴァンニ・ダ・ウーディネがストウッコをつくり、ジュリオが物語を描くか、少なくとも〔ジュリオが〕素描を用意しウーディネが描くことが出来るよう、同意させてください。そのために、貴殿は作品が制作され完成されたものとなるように、ご自身のやり方で調整を図り、この煩いごとを取り除いてください。

泉に関して。貴殿は水道管と小屋、内壁を調達させるようにお願いします。そうこうするうちに私たちが行くことになるので、そちらで実際にどうなすべきかを話し合しましょう。

サンテウスターキオの農家について²。別の書簡で私たちが記したように、貴殿はサンタニエーゼの修道士たちとどれだけ〔交渉が〕出来るかを探して下さい³。彼らの役に立たないのなら、この取り決めに気に入るでしょうから、この別件についてはゆっくり考えましょう。

例の場所が教皇聖下のお気に召したことは、大変喜ばしいことです。しかし別の機会にすでに記した通り、貴殿におかれましては、聖下がまだ湿った部屋に長い間留まり過ぎないように気をつけて下さいますように。

ふたつの部屋の天井は、近頃注文した通り平らになるようにして下さい⁴。そのため、貴殿はバルトロメオに次のように言ってください。ストウッコなどを練るためのモルタルや似たようなものについて手紙に記すこと、買い足しせずにいまあるすべての道具を急いで探すこと、軍用品を見れば銅色のモルタルがあるのでそれを使うようにと。もし何か別なものが足りない場合、さきほどの軍用品の中にちょうどよいものがあれば、それを用いさせてください。

貴殿が別の手紙で使ったと記していた5ドゥカートについて、いくらとお書きになっていたか私たちはよく覚えておりませんが、あのバルトロメオから返却させるようにして下さい⁵。私たちはここカレッジにおり、そちらにいないのが残念ではありますが、貴殿のご好意と便宜に預かり感謝いたします。ごきげんよう。カレッジにて、1520年6月4日。

兄弟ユリウス〔ジュリオ〕教皇庁尚書院副官

[書簡2] 1520年6月17日付けの書簡

キリストの名において信仰深い、親愛なる父にして兄弟へ。今月12日の貴殿の書簡を近頃受け取り、そこから多大な喜びを得ました。まるであなたご自身と読み笑いながら言葉を交わしたかのようでした。ここにいる私の秘書官たちはみなすでに、私が貴殿の書簡を食い入るように読むことをよく知っているので、憂鬱な事柄が記してある書簡を私に何とか読ませようとする際には、まず貴殿の書簡でおびき寄せるというやり方で口実をつくり、私を騙し始めたのです。あなたの書簡は全て喜びと慰めに満たされており、甘いものを見せ、それから後ろに隠された苦さを私に示すのです。いまや貴殿は私の家臣たちに技術を教授したことがお分か

りになるでしょう。

水道について。壁の中を伝わせることは大変良いと思いますが、それを取り除いたりつなげることになったり、時に傷が付いた場合に、その中に入れるような小さな窓をいくつか造るように、ともかくさせてください。そのため窓は、水道管に対して多すぎる量の水を流す際に、水が流れ出ない程度の高さになるでしょう。

あのふたりの気まぐれな画家たちが同意に達し、仕事をするならば喜ばしいことです⁶。

物語、つまり寓話について。変化に富んだものが私には好ましく、つながりがあり連続するかは気にいたしません。画家が「これは馬です」といったような但し書き⁷を付け加える必要がないように、とりわけ、有名なものが望ましいでしょう。貴殿が書いて下さったオウィディウスの物語は、好みになつていきますので、美しいものを選び出すようにしてください。それについてはあなたにお任せします。述べた通り、私は分かりにくいものは望んでおらず、変化に富み、選り抜かれたものが良いのです。旧約聖書の物語は教皇聖下のロτζャで十分でしょう⁸。

家の彫像について。保管してあると言って頂き、良かったです⁹。それは移さないとは思いますが。ストウツコでいくつ制作するかについては、まずひとつ作らせてみましょう。

彼らが約束した通りになるよう説得するため、あなたたちが用いた巧みな方法については、心底笑いました。この者たちに効き目があれば、私たちは非常に満足するでしょうが、彼らとの同意と和解がなくてはそうはいきません。

参事会員について。あなたがたが彼らから返事を受け取ったことは、やはり喜ばしいです。

アルメツリーニ様に御所望どおりに手紙を書きました¹⁰。しかし、その手紙は私たちが持つ感情には軽いものです。

お気に召さないのであれば、何としてもあなたがたのディアナを頂きたいものです。あなたがたは狩人であり、なぜ心変わりしたのかは存じませんが、すべてにおいてポイボスに任せたとすることはよく分かりました。

建物、水道、ロτζャ、すべての鷹¹¹、貴殿の賢明と庇護、お気遣いにご協力お願いいたします。ごきげんよう。フィレンツェにて 1520 年 6 月 17 日。

あなたがたの兄弟ユリウス〔ジュリオ〕 教皇庁尚書院副官

【解題】

ジュリオ・デ・メディチとマリオ・マッフェイ

はじめに

本稿は、1520 年 6 月に枢機卿ジュリオ・デ・メディチ (1478 ~ 1534) がアクイーノ司教マリオ・マッフェイ (1463 ~ 1537) へ送った 2 通の書簡 (フォルリ、市立図書館蔵 Forlì, Biblioteca comunale, Raccolta Pinacastelli, *Autografi*, Giulio de' Medici, Nos. 1-2) の翻訳と、その注釈である。

- ・1520 年 6 月 4 日付け、カレッジのジュリオ枢機卿からローマのマッフェイ宛て書簡 (以下、書簡 1)
- ・同年 6 月 17 日付け、フィレンツェのジュリオ枢機卿からローマのマッフェイ宛て書簡 (以下、書簡 2)

この 2 通の書簡は、モンテ・マリオに建設中であったメディチ家のヴィツラ (現ヴィツラ・マダマ) (fig. 1) における装飾の制作者や、進捗状況などを伝える一次史料として、アドルフォ・ヴェントウーリの公刊以来、



fig. 1 ヴィッラ・マダマ、ローマ、モンテ・マリオ
1518-1527年頃

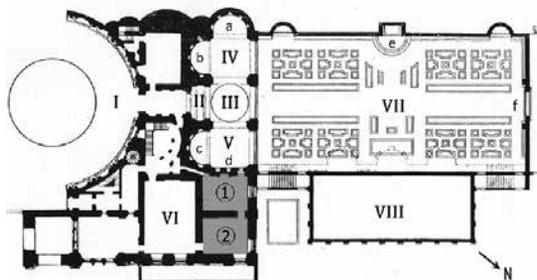


fig. 2 ヴィッラ・マダマ現状平面図



fig. 3 ヴィッラ・マダマ、ロジヤ内部
1520-1525年



fig. 4 ヴィッラ・マダマ、小室内部 (fig. 2, ①)



fig. 5 ヴィッラ・マダマ、小室の天井
(fig. 2, ①)



fig. 6 ヴィッラ・マダマ、左廊南東側エクセドラ壁面 (fig. 2, b)

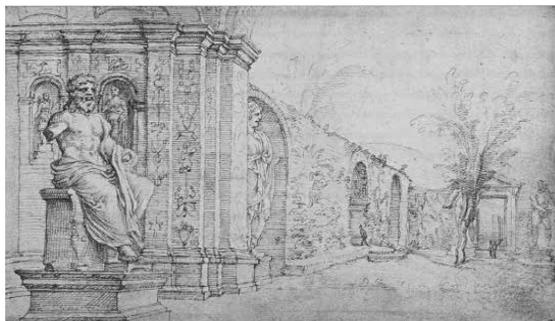


fig. 7 マールテン・ファン・ヘームスケルク《ヴィッラ・マダマの景観》
16世紀後半、ペン、褐色インク、紙、136×211 mm、ベルリン
国立美術館 inv. 79D2, f. 24r.



fig. 8 《象の泉》ヴィッラ・マダマ庭園 (fig. 2, VII. e)

その重要性が確認されてきた¹²。ヴィッラ・マダマに関する史料は、教皇庁財務管理局における複数の支払い記録を始め、カステリオーネやイザベッラ・デステなど建設中のヴィッラを訪れた人物が記した書簡等、多く存在する。そうした一次史料の中でここで採り上げる2通の書簡がとりわけ重要なのは、それが建造の注文主であるジュリオ・デ・メディチ本人の手で記されたものであり、ヴィッラの装飾に関するパトロン側の意向を示す唯一の証言であるからだ。以下では、ジュリオ枢機卿と書簡の受け取り手であるマリオ・マッフェイ司教について基礎情報を確認し、書簡内容に関連した補足事項を記述したい。

ジュリオ・デ・メディチとマリオ・マッフェイの関係

ジュリオ・デ・メディチは、1478年5月26日に、ジュリアーノ・デ・メディチの庶子として生まれた¹³。ジュリアーノが「パッツィ家の陰謀」で暗殺された後に誕生したジュリオは、叔父にあたるロレンツォ・イル・マニーフィコの息子たちと兄弟同然に育てられ、次男のジョヴァンニ・デ・メディチとはピサ大学での勉学やヨーロッパ遊歴に同行するなど、幼少より共に過ごしていた。1513年、ジョヴァンニがレオ10世として教皇位に就くと、枢機卿に任命されたジュリオは、教皇の補佐役として活躍し、1517年には教皇庁尚書院副官 Vicecancelliere の役職に任じられた。書簡を発送した1520年6月当時、ジュリオ枢機卿はフィレンツェにいた。1519年5月にウルビーノ公ロレンツォ・デ・メディチが、その8か月後にロレンツォの母アルフォンシーナ・オルシーニが死去し、フィレンツェではメディチ勢力の基盤が幾分不安定であった時期にあたるこの頃、教皇庁ではアウグスブルクのマルティン・ルターに対する教書の作成が進められていた。

各書簡の冒頭には、「今月初めの貴殿による最新の知らせ」や「今月12日の貴殿の書簡」とあり、ジュリオがローマのマリオ・マッフェイ司教と頻りに書簡を交わしていたことが伺える。書簡において「Vostra Paternità (神父様)」と呼びかけられたマリオ・マッフェイとは、どのような人物だったのだろうか。

マッフェイ家は、トスカーナの小都市ヴォルテッラ出身で、15世紀前半より2代に渡って教皇庁の職務に従事した一族である¹⁴。一族が教皇庁で職務を得る礎を築いたのは、マリオの父親にあたるゲラルド・ディ・ジョヴァンニ・マッフェイで、1430年代より教皇庁で書記を務めた。ゲラルドの従兄弟には、トンマーゾ・インギラーミの前任としてユリウス2世の図書館司書を務めるジュリアーノ・マッフェイがいた。ゲラルドは15世紀半ばに結婚して4人の男子をもうけ、マリオはその末弟にあたる。

4人の息子のうち、若くして死去した次男ジョヴァンニ・パッティスタを除き、3人もまた教皇庁に勤める。長男アントニオ (c.1450～78) は教皇庁で写字生を務める聖職者だったが、カテリーナ・コルテージと結婚した。1472年、メディチ勢力に故郷ヴォルテッラが略奪されたことに怨恨を募らせたアントニオは、「パッツィ家の陰謀」に加担し、処刑された。しかしこの事件への関与は、他のマッフェイ一族がメディチ家に仕えることの大きな障害とはならなかったようである。兄弟のうち最も傑出していたのは三男ラファエーレ (1451～1522) で、「イル・ヴォルテッラーノ」の通称で親しまれた人文主義者だった。ラファエーレはアンジェロ・ポリツィアーノやミケーレ・マルッコと親交を持ち、ヴォルテッラでは私的なアカデミーも主催していた。アリストテレスやホメロス、クセノフォンといったギリシア古典文学の翻訳に励み、1506年には『都市注釈』という百科事典を出版した¹⁵。

末弟のマリオ (1463～1537) は、兄ラファエーレと思想を共有した教養豊かな人物で、教皇庁尚書院に務めていた。古典や建築設計にも造詣が深く、私的なアカデミーをローマで主宰し、ヤコポ・サドレートとも親しくしていた。1507年にサン・ピエトロ大聖堂改築事業が本格化すると、外交上の職務のため派遣され

ていたフランスから、教皇ユリウス 2 世によって呼び戻されており、この頃にラファエッロやサンガッロ一族と交流を持ち始めた可能性も推測されている¹⁶。同時代の人文主義者パオロ・コルテージの『枢機卿論』では、マリオは教養と機知に富んだ人物と評されている¹⁷。1516 年からアクイーノ司教を務め、1519 年にはレオ 10 世付きの高位聖職者 *prelato domestico* に任命されている。

ジュリオ枢機卿は書簡 1 において、芸術家の折衝について「ご自身のやり方で調整を図り、この煩いごとを取り除いてください」とマリオ・マッフェイに仲介を依頼しており、また書簡 2 の冒頭では、マリオの人柄と、ジュリオ枢機卿との親しげな関係がよく示されている。ジュリオがマリオ・マッフェイの書簡を心待ちにし、その内容に楽しみ笑っているという一節は、神経質で知られるジュリオ・デ・メディチの気質を考慮すると一層印象深く、ジュリオはこの 15 歳年上の司教に信頼感を持ってヴィツラの造営管理を委任していると読むことができるだろう。

装飾の制作者と主題に関する話題

2 通の書簡内容を検分すると、ここではヴィツラの内部装飾と、庭園の水道設備にまつわる問題が主な話題となっていることが分かる。装飾の制作者と主題について記されていることから、この書簡の交換以降制作が開始されたと一般的にみなされている。

まず装飾に関しては、その制作者と主題選択についての重要な記述が見られる。制作については、ジョヴァンニ・ダ・ウーディネとジュリオ・ロマーノの名が記され、その分担をめぐる問題と解決が取り沙汰されている。書簡 1 の時点ではジュリオもマッフェイも「ふたりの馬鹿者」に頭を悩ませていたが、書簡 2 ではふたりの画家が「同意に達し、仕事をするならば喜ばしいことです」と記されており、衝突がひとまず解決したことが窺える。また、主題に分かりやすいものを選ぶよう記した折に「画家が『これは馬です』といったような但し書きを付け加える必要がないように」と記されているが、これはアイリアノスが語る稚拙な絵画にまつわる次のようなエピソードの引用である。

絵画の技術が始まった頃、つまりいうなればまだ乳離れもせず、襦袢にくるまっていた頃は、動物を描いてもすこぶる稚拙であったため、画家がわざわざ絵に、これは牛、あれは馬、あれは木というふうに添書きをせねばならなかった¹⁸。

書簡 1 の冒頭の記述、そして実際のヴィツラの装飾の制作状況を考慮すると、手紙の文章は、天井画の出来栄えに対する若干の懸念とも読み取れるように思える。ラファエッロ亡き後、大規模な装飾事業での役割分担は容易ではなかったと見え、特にこれまで装飾分野のエキスパートとして活躍したジョヴァンニ・ダ・ウーディネに物語場面を描せることにわずかな憂慮があったのかもしれない。

これに加え、書簡 2 では装飾主題の要望が記述されているが、ジュリオはそれほど細かい指示を送ってはいない。ヴァチカン宮殿の「ラファエッロのロτζジャ」で描かれたような旧約・新約聖書物語を避け、オウィディウスからいくつか適した主題を選び出すようにとの指示は、いささかそっけない印象を受ける。異教主題の選択は、枢機卿の邸宅には旧約聖書の主題が相応しいというコルテージが著作で奨励した指針に反するものであったが¹⁹、壮大な規模を誇る古代風建築の内部には、やはり異教神話の主題を用いることが求められたのだろう。

「オウィディウスの物語」、変化に富んだエピソードを選び出すようにという要望通り、現存する「庭園のロτζャ」(fig. 3)の三つの径間ヴォールトやエクセドラ半円ドームに表された装飾主題の典拠は、様々である。このうち、オウィディウスに由来する主題は、とくに右廊(北東側径間)に多く見られることに留意したい。『変身物語』における説話《ポリュフェモスとガラテア、アキスの物語》(第13書)は、右廊エクセドラにストウッコ浮彫連作として表され、《サルマキスとヘルマフロディートス》(第4書)はヴォールトに描かれている。筆者は物語内容と寓意を検討した結果、この右廊の装飾プログラムの核をなすのはジュリオ・デ・メディチの称揚を意図するガラテアの図像であり、一方の左廊(南西側径間)ではレオ10世を讃える図像プログラムが形成されていると考えているが、書簡2の記述はこうした考察内容に沿うものであるよう見える²⁰。つまり、ここでジュリオ・デ・メディチはおそらく右廊装飾の主題について返答していると推測できるのである²¹。

彫刻の設置と水道設備

書簡内の興味深いやりとりとして、内部に設置する彫刻についての記述も見られる。1525年5月にヴィッラへ招待されたイザベッラ・デステは、室内に置かれていた彫刻群を称賛しており²²、マールテン・ファン・ヘームスケルクの素描には、ロτζャから見た庭園に当時設置されていた古代彫刻や(fig. 7)、エクセドラのニッチに小型の彫像が置かれていた様子がスケッチされている²³。ロτζャの壁面には多数のニッチが設えられており(fig. 6)、庭園を含め、メディチ家の所有する古代彫刻コレクションを展示する役割も果たしていたことは確実である。また、書簡2では「ストウッコでいくつ制作するかについては、まずひとつ作らせてみましょう」とあり、必ずしもすべての彫像が古代作品ではなかったのかもしれない。

書簡では、庭園にめぐらされる水道設備に関して、かなり細かな指示を書き記していることも注目を集めており、水道管の処置についての気配りが、ジュリオ・デ・メディチの性格を反映していると指摘されている²⁴。とくに設置に関しては、「そうこうするうちに私たちが行くことになるので、そちらで実際にどうなすべきかを話し合ひましょう。」と、実際に枢機卿自身が立ち会うつもりであることが記述されている。ジュリオ・デ・メディチは水道設備、水について議論を交わすことが個人的な楽しみであったと、ヴェネツィア大使マルコ・フォスカリは記録しており²⁵、ヴィッラの泉にも執心していたことが伺える。象の頭部を据え、モザイクで周囲を装飾するというヴィッラ独特の《象の泉》(fig. 8)の構想には、ジュリオ枢機卿の意向が反映しているとも考えられる²⁶。

終わりに

ジュリオ・デ・メディチからマリオ・マッフェイへ宛てた2通の書簡は、ヴィッラ建造の進捗状況を伝える重要な史料であり、同時に内部装飾についてジュリオ枢機卿の関心の範囲を示す貴重な証言となっている。その文面を見ると、枢機卿自身は1520年時点では装飾各主題の詳細な決定には関与していなかったと見え、内部の装飾プログラムの基本的な構想は、当時ローマにいた知識人たちが担当したと考えるのが妥当であろう。確証はないものの、書簡の受け取り手であるマリオ・マッフェイは、1556年に『ヒエログリフィカ』を出版する学者ピエリオ・ヴァレリアーノはじめ知識人とも親交を持ち、サン・ピエトロ大聖堂再建にも関わった経験がある点を考慮すると、ヴィッラの装飾プログラムを発案する際、中心的役割を演じた可能性もある。

註

- 1 訳出にあたり、ジョン・シアマンを底本として用いた。J. Shearman, *Raphael in Early Modern Sources*, New Haven - London, 2003, 1520/44, 46, pp. 599-601, 602-5. 本文中、訳者による註は〔 〕で示した。
- 2 モンテ・マリオの土地に関して、サンテウスターキオ修道院は何らかの権利を所有していた可能性がランチャーニによって示唆されており、土地の譲渡に関する交渉が進行中であったのかもしれない。しかし、それを裏付ける文書史料はいまだ引用されたことがないため、詳細は不明である。Ibid, p. 601; R. Lanciani, *Storia degli scavi di Roma e notizie intorno le collezioni romane di antichità*, II, Roma, 1903, p. 166.
- 3 サンタニューゼの修道院は、該当する土地への水の供給を管轄していた。
- 4 「ふたつの部屋」は、「庭園のロτζジャ」と「ジュリオ・ロマーノの間」に隣接するふたつの小室 (fig. 2 の網掛け部分) を示すと考えられる。この部屋の天井には木製の桁が格子状に渡され、平らに仕上げられている (figs. 4, 5)。
- 5 パルトロメオ・ゴルフレドゥツィ・ダ・ピストイア。ヴィッラの管理人として現地に滞在していた。建設に関する支払いに頻繁に名前が登場する。Shearman, *Raphael in Early Modern Sources*, cit.
- 6 ジュリオ・ロマーノとジョヴァンニ・ダ・ウーディネ。
- 7 クラウディウス・アイリアノス『奇談集』第10書10節からの引用であることが、ジュリアン・クリーマンによって指摘されている。クリーマンの指摘を引用したのはシアマンだが、その参照源については触れられていない。アイリアノスの著作では、絵画挿絵期の画家が自ら描いた絵に添え書きをしたというエピソードが記されている。Cladius Aelianus, *De Varia Historia*, X, 10; アイリアノス『奇談集』松平千秋・中務哲郎訳、岩波書店、1989年、273-4頁; Shearman, *Raphael in Early Modern Sources*, cit., p. 604.
- 8 ヴァティカン宮殿にある「ラファエッロのロτζジャ」(1517-19年)。
- 9 ローマのメディチ家の邸宅、サンテウスターキオ地区のバラツツォ(現在の上院、バラツツォ・マダマ)に所蔵されていた彫刻コレクションを指すと思われる。
- 10 フランチェスコ・アルメリーニ＝メディチ。教皇レオ10世在位期間中に財務面のアドバイス、資金繰りを担当した人物。1517年にはサン・カリスト聖堂の枢機卿に任命され、カメルレンゴも務めた。
- 11 モンテ・マリオからテヴェレ河畔までの土地は、当時ブラート・ファルコーネ(鷹の平原)と呼ばれ、ヴィッラが建つ丘の斜面はモンテ・ファルコーネと称されていた。シェリル・ライスは、マッフェイが1523-24年にかけて書簡の中でヴィッラを「ヴィッラ・ファルコーネ」と呼んでいたことに着目し、ファルコーネという名称は建築のある土地を示すと同時に、ダイヤモンドの指輪を持つ鷹を表したメディチの標章をも示唆するのに適していたと考察している。S. Reiss, “Villa Falcona”: The Name Intended for the Villa Madama,” *The Burlington Magazine*, CXXXVII, 1995, pp. 740-2.
- 12 ローマの書店経営者、古文書のディーラーであるルイージ・アッツォリーニ博士の旧蔵。A. Venturi, “Pittura nella Villa Madama di Giovanni da Udine e Giulio Romano,” *Archivio storico dell'Arte*, II, 1889, pp. 157-8; R. Lefevre, “Un prelado del '500, Mario Maffei, e la costruzione di Villa Madama,” *L'Urbe*, XXXII, 1969, pp. 1-11.
- 13 ジュリオ・デ・メディチの略歴については、主として以下を参照。A. Prosperi, “Clemente VII,” in *Dizionario biografico degli italiani*, 26, Roma, 1982, pp. 237-9.
- 14 マッフェイ一族については、J. F. D'Amico, *Renaissance Humanism in Papal Rome*, Baltimore - London, 1983, pp. 81-8. を参照。枢機卿ジュリオの芸術パトロンエージ、マッフェイとの関わりは以下の文献を参照。S. E. Reiss, *Cardinal Giulio de' Medici as a Patron of Art 1513-1523*, Ph. D. dissertation, Princeton University, 1992; S. E. Reiss, “Giulio de' Medici & Mario Maffei: A Renaissance Friendship & the Villa Madama,” in L. R. Jones - L. C. Matthew, ed. by, *Coming about...*, Cambridge, Mass., 2001, pp. 281-8.
- 15 R. Maffei, *Raphaelis Volterrani Commentariorum Urbanorum liber I-XXXVII*, Roma, 1506; R. Maffei, *Odisea Homeri per Raphaelem Volterrannum in latinum conserva*, Roma, 1510; *Oeconomicus Xenophontis ab eodem latio conversus*, Roma, 1506. 著作の出版によって、ラファエーレは人文主義者として高く評価されたが、おそらく一族の繁栄のため結婚し、アレクサンデル6世下の教皇庁における道徳観の低下への嫌悪感からカヴォルテッラへと戻り、*De Institutione Christiana* (1518), *Stomana* (1519-20)の執筆に従事した。D'Amico, *Renaissance Humanism*, cit., p. 189 et seq..
- 16 Ibid, p. 85; Reiss, “Giulio de' Medici & Mario Maffei,” cit., p. 284.
- 17 P. Cortesi, *De cardinalatu*, Roma, 1510, fol. LXXXII; Reiss, “Giulio de' Medici & Mario Maffei,” cit., p. 287, n. 15. パオロ・コルテージ(1465-1510)はローマ出身の聖職者、人文主義者。ポンポニオ・レートに師事した後、サン・ジミニャーノにて隠遁生活を送り執筆活動に励んだ。
- 18 アイリアノス、前掲書、273-4頁より引用。
- 19 コルテージは『枢機卿論』第2書で枢機卿はどのような邸宅に住むべきかを記し、「よく絵画に表されるような神話物語ではなく、旧約聖書にある私たちの預言者の教訓」が描かれるべきと述べている。K. Weil-Garris - J. F. D'Amico, “The Renaissance Cardinal's Ideal Palace,” in H. A. Millon, ed. by, *Studies in Italian Art and Architecture 15th through 18th Centuries*, Roma, 1980, p. 91; Reiss, “Giulio de' Medici & Mario Maffei,” cit., pp. 285-6; C. Cieri Via, “Pierio Valeriano e la corte medicea a Roma: Presenza degli Hieroglyphica nelle decorazioni romane del primo Cinquecento,” in R. A. Pettinelli, a cura di, *L'umana compagnia: Studi in onore di*

- Gennaro Savarese, Roma, 1999, pp. 93-124.
- 20 ガラテア、ポリュフェモスに関する拙稿を参照。「ヴィッラ・マダマ、ジュリオ・ロマーノ作《ポリュフェモス》——ルーヴル美術館所蔵の素描に基づく図像解釈——」、『美術史』第170冊、2011年、179-95頁；「ヴィッラ・マダマ、ストゥッコ浮彫連作《ポリュフェモスとガラテア、アキスの物語》——ジュリオ・デ・メディチの標章との関連を中心に——」、『地中海学研究』第34号、2011年、25-46頁。
- 21 チェリ・ヴィアは中央径間に表された各主題が『変身物語』第2書に記された太陽宮殿の描写からの引用と考え、ここでの指示との関連を見出している。Cieri Via, “Pierio Valeriano e la corte medicea a Roma,” cit., p. 102 et seq.; C. Cieri Via, “Villa Madama: Una residenza “solare” per i Medici a Roma,” in S. Colonna, a cura di, *Roma nella svolta tra Quattro e Cinquecento: Atti del Convegno Internazionale di Studi*, Roma, 2004, pp. 349-73.
- 22 1518年5月18日付け、ローマのイザベッラからマントヴァのフェデリーコ・ゴンザーガ公宛の書簡。Shearman, *Raphael in Early Modern Sources*, cit., pp. 792-4.
- 23 ヘームスケルクがローマ滞在中（1532～36年頃）に描いた素描帖の一葉には、左廊に設置される《玉座のユピテル》、庭園の手前のニッチにある《ジェニオ・コロサール》（ともに現在ナポリ考古学博物館所蔵）がスケッチされている。フェデリーコ・ラウザは、17世紀のファルネーゼの財産目録に記されていた内容から、ヴィッラ・マダマに設置されていた彫刻群の再構成を試みている。それによると、ロτζジャではユピテルを中心にムーサたちが配され、「宇宙」の概念が意図されていたという。クレメンス時代に彫刻がどのように配置されていたか、ファルネーゼ家のインヴェントリーから判断することは困難である。F. Rausa, “I marmi antichi di Villa Madama: Storia e fortuna,” *Xenia Antiqua*, X, 2001, pp. 155-206.
- 24 R. Lefevre, *Villa Madama*, Roma, 1973, p. 107 et seq.; Reiss, “Giulio de’ Medici & Mario Maffei,” cit., p. 285.
- 25 E. Alberi, *Relazione degli ambasciatori veneti al senato*, ser. 2, vol. 3, Firenze, 1846; Reiss, *Cardinal Giulio de’ Medici as a patron of Art*, cit., pp. 377-8, 389; Reiss, “Giulio de’ Medici & Mario Maffei,” cit., p. 285.
- 26 拙稿『ヴィッラ・マダマ《象の泉》——動物モチーフとクレメンス7世の君主イメージ——』、『日伊文化研究』第48号、2010年、96-106頁を参照されたい。